

考える力を育てる

甲斐ゼミナール・甲斐大学予備校
校長 長田 正樹

中学生、高校生を指導する中で強く感じる場合があります。それは、内面に「考える姿勢」が育っていない生徒が多いということです。「考える姿勢」がその先の、「考える力」に繋がるわけですが、高校や大学受験はもとより、社会人として生きる上でもこのことは大きな課題になると考えています。

「考える姿勢」をどう育てたらいいのか、親としてだれもが立ち止まってしまうところだと思います。スイスの心理学者ピアジェは、『教育の目的は、知識の量を増やすことではなく、子どもが発見し発明する可能性を生み出すこと』だと言っています。知識は「考える力」の土台であることも確かなのですが、近年は「アクティブラーニング」を取り入れ、子どもたちの「考える姿勢」を育てようという指導が盛んにおこなわれるようになってきました。

「考える姿勢」を育てることは、簡単なことではありません。私は、幼いころからの適切なアプローチが最も重要ではないかと考えるようになりました。そのためには、次の二つのことに注視する必要があります。

その第一は、「体験」です。幼児は生まれてから、五感を使って様々なことを体験し、学びの獲得につなげていきます。「遊び」も主体的な「体験」といえます。本人が自発的に興味を持ったものに取り組むことで、自主性や人間関係、好奇心や探求心を育むのです。今回甲斐ゼミナールが提供する「理英会」の教材は、「学びへの体験」といえるのではないかと思います。幼児の発達を40年以上研究し、どの時期にどんな体験的教材が必要かをきめ細かくプログラムされています。授業で取り組むだけで、自然と「考える姿勢」が身につくようにという願いが伝わってきます。

第二は、「環境」です。幼児の立場からすると、家庭内環境と家庭外環境に分けられると思います。注目したいのは、家庭内環境です。お父さんやお母さんの子どもへの働きかけ、これが非常に重要であると思います。「・・・しなさい」ではなく、「あなたはどうしたいの」「なぜそう思うの」という子どもが主体となる問いかけや、本人がやりたいということをやらせてみる。親との話し合いや、遊びでの失敗が、「考える姿勢」を育てるのです。家庭内でのこうしたやり取りは、毎日繰り返されるのですから、日々の家庭が重要な教育環境ということになります。

学校教育では、「考える力」に加え、「知識の量」「理解力」「表現力」「判断力」など、様々な力を育てることを目的としています。知識をたくさん覚えること、文章が書けること、計算ができること、絵が描けること等々、成長するということは、たくさん力を獲得することだと思います。甲斐ゼミナールの幼児教育は、学びの第一段階です。その先に待ち受ける、一人ひとりの大きな飛躍につながればと願っています。